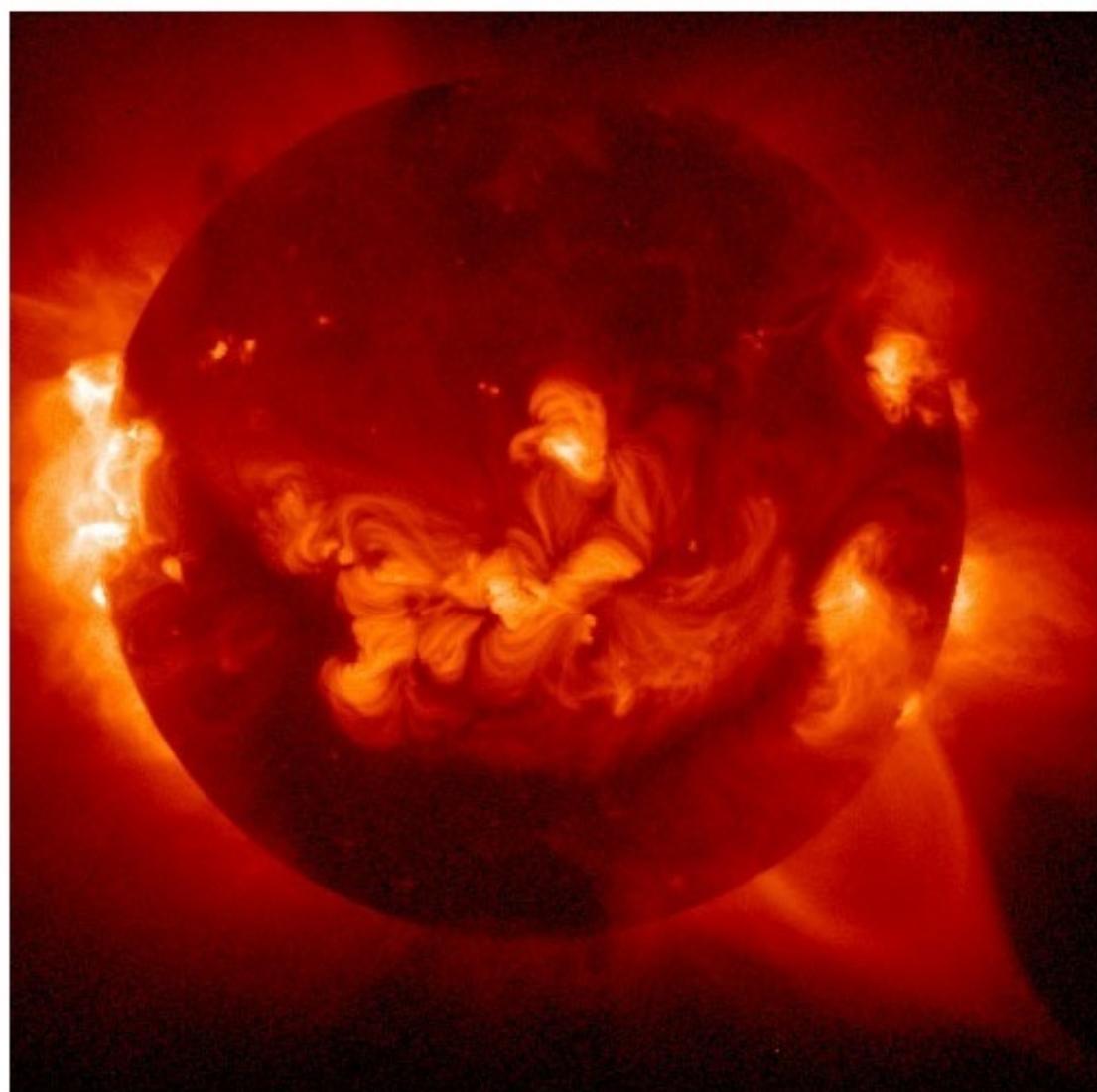


太陽星人 オメガフレア



千葉 広明

時間と空間の狭間、どこまで広がっているのか光の輝きが瞬いている。

その光の星の元にパール星と呼ばれるひとつの惑星があった。

かつて美しかったその惑星は今や荒れ果てていた。

青々とした森は枯れ、川は干上がっている。

繁栄を極めたであろう都市は廃墟と化していた。

ある日突然、宇宙から降伏を求めるゲル星人が押し寄せたのだ。

ゲル星人は、この惑星の地殻深くにある未知の金属タキオニウムを要求した。

この惑星の王オンタリオンはそれを拒否したが、ゲル星人の破壊獣の圧倒的な力の前に防衛隊は敗れ去った。ゲル星人は生物の頭にサイコメカトロンというコントロール装置を埋め込み自由に操るのだ。

「王様、敵がこの王宮にも迫ってきました！！！」

「うぬぬ、ベルヌ將軍よ。もはやこれまでか……」

「王様！このベルヌがしばらくの間敵を食い止めます！どうぞご退避を！」

「ベルヌよ。この星の王として逃げ出す訳にはいかぬ。」

「……しかし、この生まれたばかりのマモル王子は……」

王妃ブルーサファイヤの腕の中ですやすや眠る赤ん坊の頭をそっとなでた。

「王妃よ。遙か遠く太陽系という所にオメガフレアという勇者が居ると聞いたことがある。第3惑星のテラ（地球）に向けて脱出ポットを放つのだ。」

「……はい……」

王妃は侍従アンドロイドのメルを呼んだ。メルは特殊皮膚で出来ていてどんなものにも変身出来るのだ。

「脱出ポットに変身して、マモル王子をテラに届けるのです。」

「王妃様、分かりました。」

メルが胸の前で腕をクロスさせると丸い揺り籠型の脱出ポットに変化した。

王妃はそっとマモル王子を揺り籠に置き頬を撫でると、自分の首にかけていたタキオニウムで出来た宝石がはめられたペンダントを王子の首にかけた。

「・・・強く育つのですよ。自分の信じる正しい道を進むのです。お母さんはいつも見守っています。」

王妃の涙が揺り籠の上を流れた。

マモル王子を乗せた揺り籠は地球に向けて発射された。小さな流れ星が流れるように・・・

暗黒大帝ゾルバは暗黒浮遊要塞ブラックシャドウの追跡微粒子レーダーの警報音を聞くと低く恐ろしい声をあげた。

「パール星の住民を一人残らず殺せと命じたのに分からぬのか？」

「はっ！しかし、あのような小さなものまで気になさらずともよいと思ひまして・・・」

暗黒浮遊要塞ブラックシャドウの艦長は汗だくだくで答えた。

「おまえはこのわしに逆らうのだな。」

暗黒大帝は手のひらをグッと開いた。その手のひらから真っ赤な光線が放たれたかとおもうと、艦長の体が燃え上がった。

「暗殺者スパイダーキラーを呼べ。パール星から何者かが脱出したようだ。余に逆らう者はこの世界に一人として生き残れないことを皆の者に知らしめるのだ。」

「大帝様、スパイダーキラーです！」

スパイダーキラーは宇宙スーツを着ているが、ヘルメットの中はクモ型の複眼を持ち口は大きく4つに裂けている。その口で捕えた生物を真っ二つに切り裂くのだ。今までにパール星の何千人もの大人しい無抵抗の住民を殺してきた。

「パール星から脱出した者を追跡して殺すのだ。行け！」

「はっ！このスパイダーキラーが必ずや仕留めます！」

スパイダーキラーは右手を高く掲げた。

スパイダーキラーはステルスB-209のコックピットに乗り込むと追跡微粒子レーダーのスイッチをオンにした。追跡微粒子レーダーは、距離3万メクロンの位置に物体を捉えた。ステルスB-209は高速で暗黒浮遊要塞ブラックシャドウのカタパルトから発射された。

星々の瞬きを背に受けて、揺り籠は地球に向けて高速で飛んでいた。

「生命維持装置安定しています。」

マモル王子はすやすやと眠っている。

ふとメルは後方に何者かの気配を感じた。

「何かが追跡してきているようだよ。小型の戦闘機……」

「対象物の方が高速で振り切れない……」

「このままでは、マモル王子様が……」

メルは注意深く周りを調べた。

「前方6000メクロンに小惑星帯があるわ。確かあそこの小惑星帯は……」

メルは小惑星帯に方向を向けた。

小惑星帯はかつてルドル星が惑星同士の衝突で生じた細かい星の欠片の集まりである。

メルは無数の小惑星のひとつに揺り籠を近づけると窪みに身を隠した。

「マモル様、しばらくエネルギー活動を最小に落とします。」

メルは息をひそめた。

スパイダーキラーの乗るステルスB-209の追跡微粒子レーダーから物体が突然消えた。

「くそっ！どこに行きやがった！」

「前方の小惑星帯か！このスパイダーキラー様から逃げ切れると思うなよ！」

暗殺者は小惑星帯に舵を向けた。

太陽星人 オメガフレア 1

<http://p.booklog.jp/book/74474>

著者：千葉 広明

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/soranoniji/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/74474>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/74474>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ